

世界で一番 隠岐が好き!

～智とジッジの隠岐の島～



隠岐の島はユネスコが認定した世界ジオパーク。更に、フランスのブルーガイドから三ツ星認定も受けた日本海の奇跡の島。例えば名勝国賀海岸を訪れる観光客が「日本じゃないみたい!」と感動する海と絶景が広がっています。その隠岐に住む私たち祖父母と3歳になったばかりの大阪の孫が、共に過ごした丸2年間の生活を絵本にまとめました。

初めて日本海につかり塩水が辛いと知って「最高にプレミアム!」と叫んだり、ミミズさえ知らなかったのに昆虫どころか生きた魚やタコ・カニを触れるようになったり、自分の手で畑に苗を植えた野菜を収穫して食べたり、毎日貝がら拾いや魚釣りをしたり…、春夏秋冬隠岐の豊かな自然を、小さな体全体で味わい体験することにより、都会生まれのひ弱な幼児が、みるみるたくましくなっていました。私は元教員ですが、孫との生活を通して、「自然は、幼稚園や学校、塾の先生たちもかなわない、とてつもなく大きな教育力を持っている」と、改めて確信しました。(もっとも、近年は田舎の子どもたちもゲームやスマホなど、都会の子どもと同じような生活になってきているようです…)

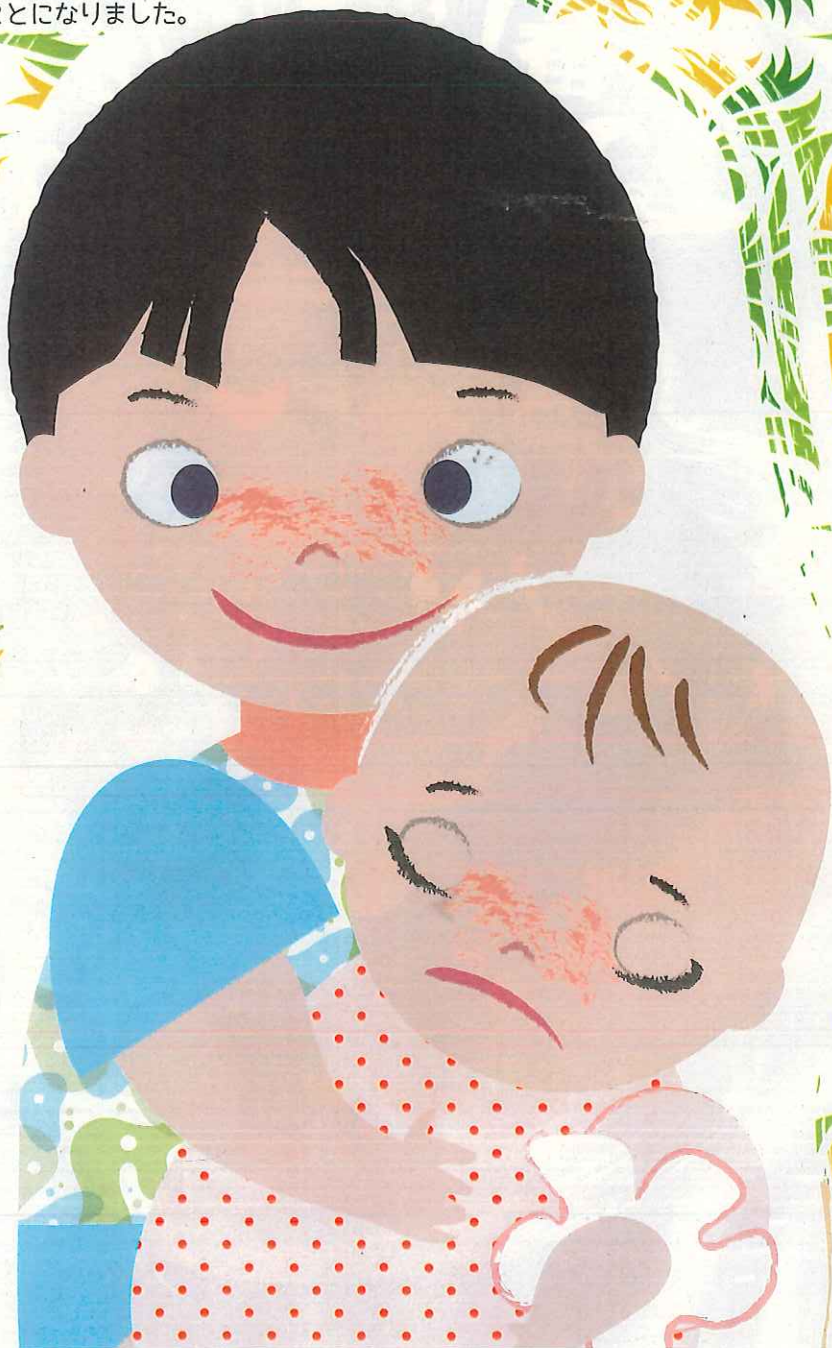
今、地方ではすさまじい勢いで人口減少、少子高齢化が進んでいます。我が家もそうですが、子どもたちは都会に出て、隣近所は高齢者だけの世帯がほとんどです。日本社会が抱える深刻な問題ですが、せめて夏休みにには孫たちを田舎に戻し、自然の中で、たくましく生きる力を育むことはできると思います。夏休み中、日本中の田舎に子どもたちの元気な声が響いてほしいと願っています。朝から晩まで自然の中で遊んでも疲れを知らない孫に、ジッジ、パッパはヘトヘトになりますが、孫と過ごした日々は、私たちにとって人生最高の宝物です。

親を離れて祖父母と何週間でも過ごせるようになり、隠岐の島での生活にすっかりなじんだ孫を、郷土出身力士「隠岐の海」の結婚式で東京に連れて行ったとき、私が「大阪も大きい街だけど、東京はもっとすごいだろ?」と言うと、「ほんまや。でも智は世界で一番隠岐が好きやで!」…4歳の子ども小さな小さな「世界」でしようが、感動で胸が熱くなりました。そして、その感動を広くみんなに伝えたいと、絵本作りを思い立ちました。構想から4年、3歳だった孫も今夏8歳になり、海外生活も3年たちました。心に大好きな「ふるさと」を持っている人間はどこでもたくましく生きていけることを、孫に教えられました。

最後になりましたが、企画段階から発刊まで、丁寧に相談に応じていただいた(株)東京印刷の皆様、心よりお礼申し上げます。

作・大西和彦
絵・inu

ぼくは智久、3歳です。パパとママと大阪に住んでいます。この間、妹が生まれて、ぼくはお兄ちゃんになりました！パパが「ともひさ、妹の名前はなにがいい？」といました。ぼくはテレビのシマジロウが大好きなので、「ハナにして」といました。ハナはシマジロウの妹だからです。ハナはちっちゃいのでママと一緒にしばらく病院にいました。



パパは外国の大学にお勉強に行っていて、今は夏休みで帰ってきているけど、すぐ行っちゃうし、ママとハナは病院だし…、ぼくがさびしくてシクシク泣いていると、大好きな隠岐の島のジッジとバツバが来てくれました。やったあ！「ともひさ、ママとハナが退院するまで隠岐に行こうか？」「うん、行く！」。



パパやママとはなれるのは初めてだったけど、ぼくは、ジッジとバツバと飛行機に乗って隠岐に行くことになりました。大阪には大きなビルやお店がいっぱいあるけど、隠岐の島にはジッジとバツバがいるし、きれいな海や山があるので、ぼくは隠岐が大好きです。

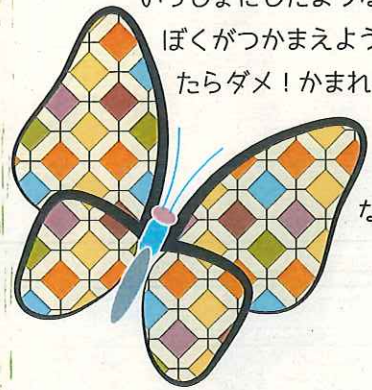
その夜は、パパやママと離れてねるのは初めてだったので、
少しさびしくなり、シクシクしかけたら、
ジッジが桃太郎と浦島太郎、かぐや姫の絵本を読んてくれました。
ぼくは亀に乗って竜宮城に行った夢を見ました。
ママが乙姫さまで、
ハナも「お兄ちゃん、お帰り」
とニコニコしていました。



ジッジの家に着きました。お外に
出たら大阪では見たこともない
何か変な生き物を見つけました。
ぼくが手にとって「これ何？」と聞く
とジッジは「ダンゴ虫とミミズだよ」。
バツバに見せると



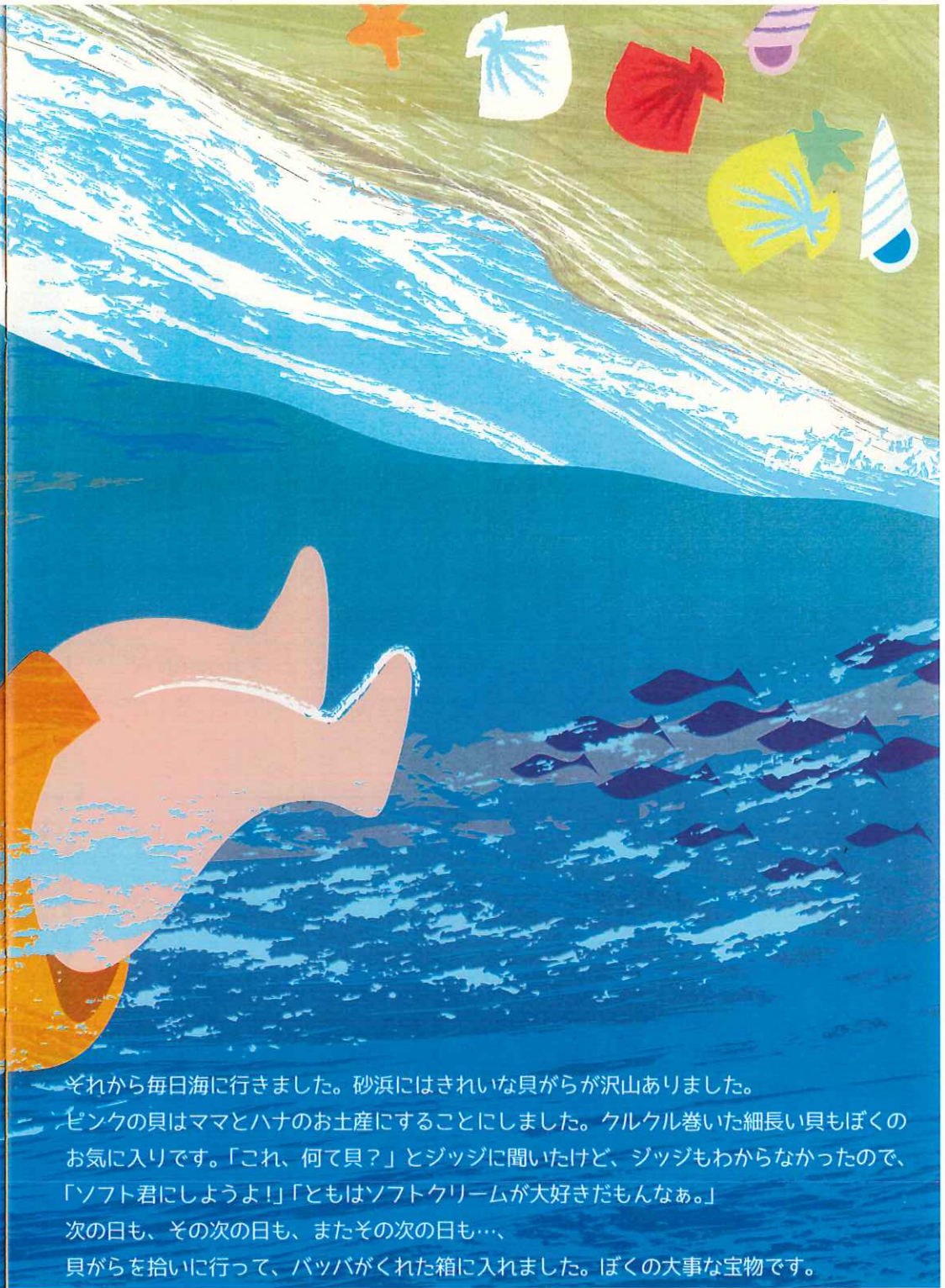
「きゃー、やめてえ！」。ダンゴ虫とミミズを
いっしょにしたような黒い虫もを見つけました。



ぼくがつかまえようとする、とジッジがあわてて「それにはさわつ
たらダメ！かまれるから！」といいました。ムカデという虫で
毒があるそうです。てんとう虫や色んなチョ
ウチョもトンボもいました。隠岐にはいろん
な生き物がいっぱい！



次の日はジッジとドライブしました。きれいな砂浜につくと、ジッジが「暑いから泳ごうよ」といいました。ぼくは、海に入ったことがなかったけど、ジッジが手をつないでくれたので初めて海に入りました。とても気持ちがよかったです。ジッジが手を離しても大丈夫でした。顔までつかると水が口に入り、ぼくはびっくりしました。海の水がこんなに辛いなんて初めて知りました。ぼくは楽しくなって、「最高にプレミアム！」と大声で叫び、万歳しました。海に入るの、もうこわくないわ。



それから毎日海に行きました。砂浜にはきれいな貝がらが沢山ありました。ピンクの貝はママとハナのお土産にすることにしました。クルクル巻いた細長い貝もぼくのお気に入りです。「これ、何て貝？」とジッジに聞いたけど、ジッジもわからなかったので、「ソフト君にしようよ!」「ともはソフトクリームが大好きだもんなあ。」次の日も、その次の日も、またその次の日も…、貝がらを拾いに行って、バツバがくれた箱に入れました。ぼくの大事な宝物です。



貝拾いのあとはヨットハーバーで魚釣りや貝とりをします。ジッジが教えてくれて、アジとメバルとカワハギとフグとベラとハモの名前を覚えました。釣れたフグをつかむと、おなかをプクッとふくらませて声を出します。「怒るでえ！」と言っているみたいです。小さな魚はかわいそうなので、「ママのところに帰ってよ。」と言って、海に放してあげます。ジッジはカニやタコもとってくれます。生きたカニやタコは初めてだったので、こわかったけど、ジッジにおしえてもらって触れるようになりました。お家に帰って「魚屋さんです。タコとカニを持ってきました。300円です。」とバツバにみせると、バツバは「ともちゃん、すごい！」とびっくりしていました。



シャボン玉もしました。早く吹くと小さなのが、ゆっくり吹くと大きなのができて、風に乗って空に上がっていきました。ぼくが「どこまで飛んでいくのかな」と言うと、ジッジが「ママとハナの病院まで行くんじゃないの」。ぼくは「大阪まで飛んでけえ！」といっぱい飛ばしました。その夜、ぼくは大きなシャボン玉に乗って、空を飛んでママに会いに行った夢を見ました。

隠岐での楽しい生活が2週間たったころ、ママとハナが退院してお家に帰ったので、ぼくも大阪に帰ることになりました。隠岐は楽しいからずっといたいし、ママやハナに会いたいし…ぼくが困ってしまってシクシクしていると、ジジが「また来たらいいから。迎えに行っておげるから。」と言って、約束の指切りをしました。

ジジと大阪に着くと、ママと、ママのパパとママのきいちゃんとおーちゃん、ママの姉妹のさっちゃんやようちゃんたちが、「ともちゃんお帰り。色が黒くなって、すごくたくましくなったねえ。」と迎えてくれました。ハナを初めて抱っこしました。小さくてとてもかわいいです。ぼくは隠岐の砂浜で拾ったピンクのベニ貝をママにあげて、隠岐で初めて海に入ったことや毎日貝拾いをしたこと、タコやカニを捕まえたことなど、お話ししてあげました。みんなが、「ともちゃん、すごい！」とびっくりしていました。



次の日、ジジは隠岐に帰ることになりました。ジジと離れるのは嫌だし、
ぼくも隠岐に行きたかったけど、また迎えに来てくれる約束をしたので我慢しました。
でも、ママと駅まで見送る途中で、ぼくは我慢できなくなって泣いてしまいました。
「また隠岐に行くからな。迎えに来てよ。」「きっと来るから。」
…隠岐はぼくの竜宮城です！

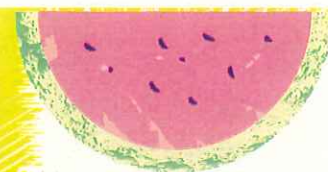


ぼくは4歳になりました。
ママとハナと大阪に住んでいます。
パパは外国の大学に行っているの、夏休みや冬休みに
しか会えません。ぼくはさびしくなると、隠岐の島の
ジジに電話をします。するとジジは大阪まで迎えに
来て、ぼくを大好きな隠岐の島に連れて行ってくれます。
飛行機だとすぐに着きます。
ジジが「今度は新幹線と特急と高速船に乗って帰ろうか。」
と言いました。ぼくは新幹線や高速船に乗るのは
初めてだったので、ワクワクしてきました。





ちょっと心配そうなママとハナに見送られて、ぼくとジツジの男三人旅が始まりました。新大阪駅に着くと、人がいっぱいいて、色んなカッコいい電車が次々に入ってきました。ぼくたちは「のぞみ」に乗りました。新幹線はとてもきれいで、速くて、岡山という駅まですぐに着きました。そこからは特急「やくも」松江駅からはバスに乗って七類港に行き、高速船に初めて乗りました。レインボージェットは海を新幹線みたいに速く進みます。大阪から色んな乗り物に乗って隠岐の島に着きました。迎えに来ていたバツバを見つけ、大きな声で「ただいまあー!」。バツバは「お帰り!」と言って、ぼくを抱きしめてくれました。



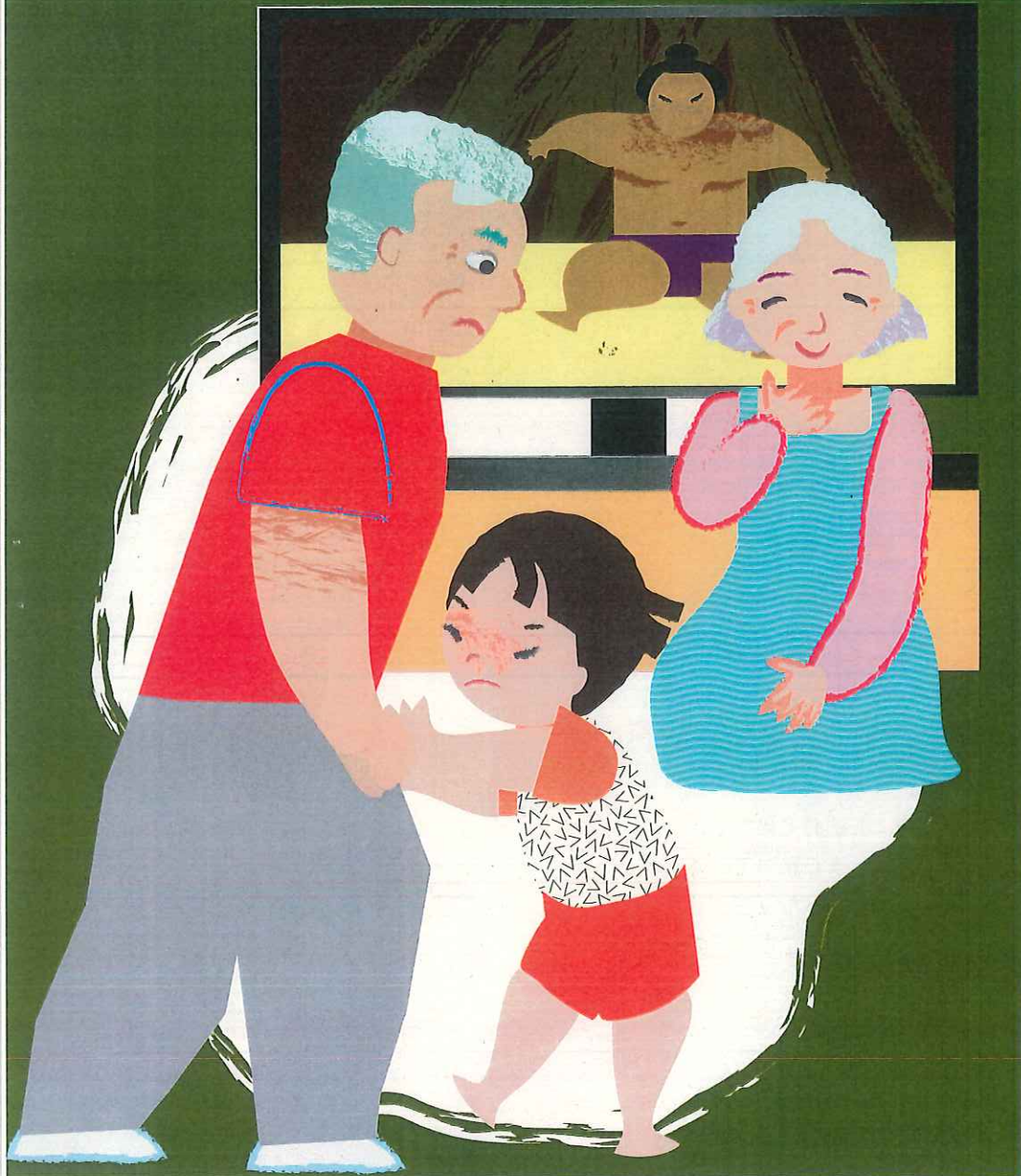
隠岐の島では、ジツジが毎日海や山へ連れて行ってしてくれます。海では魚釣りをしたり、ヨットに乗せてもらったり、貝拾いをしたりします。畑では春に野菜の苗を植えて、夏にキュウリやスイカを取って食べたり、秋にはサツマイモを掘って焼いもをしたりします。イチジクやミカンやカキや野イチゴやタナゴもあります。トマトはちょっと苦手だけど、あとの野菜も果物も、魚も貝もタコも、隠岐の島の食べ物はみんな、ゼーンぶ最高です。



松葉ガニを初めて見たとき大きくて、まだ動いていてちょっと怖かったけど、バツバが料理してくれたので食べてみました。「信じられないくらい、おいしい!」というジツジもバツバも大笑いしていました。



パッパは相撲が大好きで、テレビでやっているときは、いつもキャーキャー言いながら見えています。一緒に見ていたら、ぼくも面白くなって、相撲取りさんの名前を全部覚えました。ママは大阪なので豪栄道を応援しているけど、ぼくは隠岐の海と高安や遠藤が好きです。テレビの相撲が終わると、ジッジやパッパと相撲をします。パッパにはいつも勝つけど、ジッジとはいつも8勝7敗でぼくが勝ちます。



隠岐で何週間かたつと、いつもジッジは「とも、ママやハナがさびしいから大阪へ帰ろうか」と言います。ぼくはずっとずーと隠岐にいたいけど、ママやハナに会いたいの困ってしまいます。隠岐を離れるときは涙が出そうになるけど、パッパに「またすぐ帰ってくるからな」と言います。大阪のお家について、ママやハナ、きいちゃんとあーちゃん、ようちゃんやさっちゃんたちに、隠岐のお土産をあげたり、写真を見せたり、お話をしあげると、みんなが「ともちゃん、すごーい！」といます。ぼくはうれしくなります。でも次の日、ジッジと別れるときは、いつもシクシク…。ジッジは抱きしめてくれて「泣いたらあかん。ともは男の子だから、パパがいないときは、ママやハナを守ってやんなあかん。また来るから」と言って、指切りをします。ぼくはいつも泣きながら「来週来てよッ！」



しばらくして、ジッジから電話がありました。

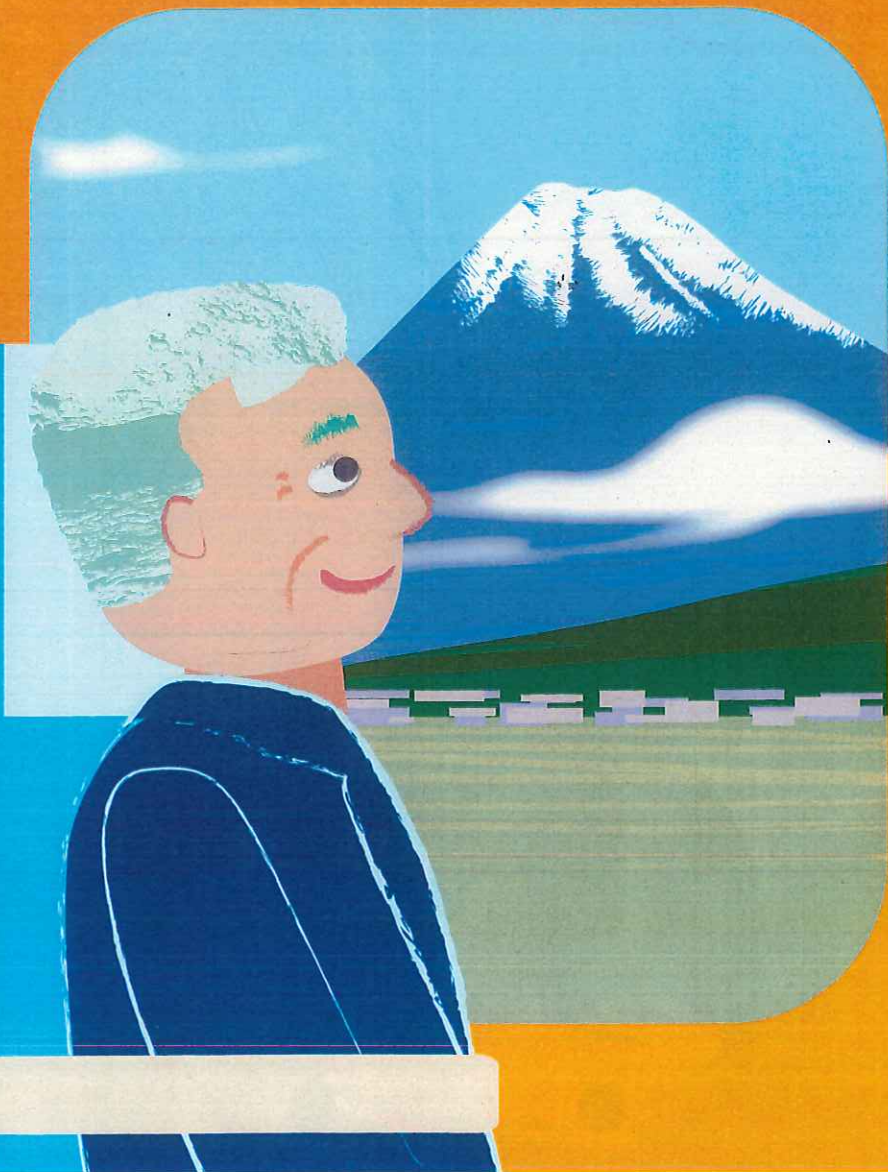
「とも、ジッジは隠岐の海の結婚式で東京へ行くけど一緒に行くか。」

「行く！」…ジッジが大阪まで来てくれて、新幹線で東京へ行くことになりました。

新幹線は前に乗ったことがあるけど、東京ははじめてです。ジュースを飲んだりアイスクリームを食べたりしていると、ジッジが「とも、あの山が富士山やで。日本で一番高い山や。

ジッジはてっぺんまで歩いて登ったことあるで。ともがもう少し大きくなったら一緒に登ろうな。」

と言いました。窓の外に大きな山が見えました。「すごいなあ」。



東京に着くと、人がいっぱいいて、大きなビルもいっぱいあってびっくりしました。

ジッジが「とものお阪も大きい街やけど、東京はもっと大きいで。すごいやろ。」

といました。「ほんまや。でも、ともは世界で一番隠岐が好きやで。」

ジッジは「そうか。世界で一番隠岐が好きか。」とニコニコしていました。

だって、隠岐の島にはジッジやバツバがいるし、いろんな魚やきれいな貝もとれるし、

おいしい野菜や果物もいっぱいあるし、きれいな海や山でいっぱい遊べるし…ぼくの竜宮城や！



隠岐の海の結婚式は大きなホテルで、お客さんもいっぱいびっくりしました。
小さな子どもはぼくだけだったけど、テーブルに「智久ちゃん」って書いた席もあって、
色んなごちそうがいっぱい出てきました。隠岐の海やお嫁さんと一緒に写真を撮ったり、
色んなお相撲さんに抱っこしてもらって写真をとったりしました。
帰るときにはお土産ももらって、楽しかったです。大阪に帰って結婚式のお話をすると、
みんな「ともちゃんはいいなあ」とうらやましがっていました。



夏休みにパパが外国から帰ってきました。
半年ぶりなのですごくうれしかったです。
家族みんなで隠岐の島に帰りました。
海遊びをしたり、パーベキューをしたり
していっぱい遊びました。

隠岐の島はいつも楽しいけど、
パパやママやハナも一緒だった
のもっと楽しかったです。
でも、ジッジとバツバが
ハナばかり抱っこするのは
ちょっと嫌でした…。

パパの夏休みが終わって、外国の大学に帰るときに、ぼくたちも一緒に行くことになりました。ぼくは「ジッジやバツバと隠岐にいたい。」って言うのに、パパやママと一緒に連れて行くというし…。小さな声でジッジに「ジッジやバツバと隠岐で暮らしたい。」と言ったら「そうしたらいい。」「でも連れていかれるかもしれへんで…」と、ぼくがシクシクするとジッジも困ってしまいました。けど、ぼくたちはパパと一緒に行くことになりました。明日出発です…。



関空に着いたら、いきなりジッジが目の前に現れました。「見送りに来たで。」やったあ！ぼくはジッジに抱きつきました。「ジッジも一緒に行こうよ。」という、ジッジは「来年の夏休みにみんなで帰ってくるやる。隠岐で待ってるから。」と抱きしめてくれました。ぼくは泣いてしまいました。ジッジも涙が出ていました。



「世界で一番隠岐が好きだからな。来年の夏に帰るからな。スカイプしような。」と指切りしました。とうとう出発の時間になってしまいました。ぼくはジッジに手を振りながら飛行機に向かいました。…早く来年にならないかなあ…。

